

浄土

おぼん号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別授受記録誌第三五二号)
昭和三十九年六月二十五日 印刷 昭和三十九年七月一日発行

第三十卷

第七号

ご法語で味う 念仏の真随

村瀬 秀雄 著

一枚起請文をめぐって

新書版一〇二頁・写真版二葉
価 一二〇円・(送 三〇円)

目次……一枚起請文とは……観念の念仏を排す……

聖道はあり得ない……信仰の目標……本願念仏を

申す……ひらに信ずる……すべてを包含する……

二尊の前に誓う……只一向に念仏すべし……御遺

訓にはげむ……二相承の合流……ご法語索引

信徒必携の奥義書

ご法語一〇〇句を収録

発行人

法然上人鑽仰会

東京都千代田区飯田町一の二一
振替 東京 八二二一八七番

香りたかき浄土トラクト 一既刊一

選択集私解	大正大学教授 文 竹中 信常著	新書版 120 P	価 120円 〒 30円
真理のはなたば	大正大学教授 文 佐藤 良智著	新書版	価 70円 〒 20円
日常勤行式の解説	村瀬 秀雄著	新書版 90 P	価 120円 〒 20円
信仰への導き	文 博 佐藤 賢順著	B 6 判 16 P	価 15円 〒 10円
①月影抄さ ②葵ぐさ	村瀬 秀雄著	B 6 版 16 P 各冊	価 15円 〒 10円
浄土宗のおしえ	大正教授 大助 宮林 昭彦著	新書版 20 P	価 25円 〒 10円

念仏をひろめるために心をそそぐ布教家に (多数申込みには)
真実の信仰をもとめている檀信徒の方々に 割引いたします

発行所 法然上人鑽仰会

電話 (262) 5944
振替 東京 82187

おぼん号



往生のうつはものにきらはるものなし。かるがゆへにひろく通ずといふ也。

法然上人御法語

— 目 次 —

表紙 ぼさつ像

随 想	大野法道・鷹司誓玉・柏熊岬二	(2)
供 養	岸 信 宏	(4)
お盆の句	龍 淵 洞	(6)
大文字の送り火	樋口 富 麻 呂	(20)

【特集】 現代人の生死観をめぐって

故岸本教授のばあい	編 集 部	(8)
岸本さんの告別式	佐 藤 密 雄	(12)

近世文名録 西村常純僧正	高 橋 良 和	(14)
新本堂の夢	土 佐 舜 成	(16)
童話 狩人とからすとへび	北 村 謙 順	(24)
学会手引 大客殿を完成した創価学会		(19)
ご法語をいただく		(23)
四つの心		(27)
編集後記		(33)

中国浄土教物語 終南山の善導大師	牧 田 諦 亮	(27)
------------------	---------	------

お 盆

大野 法道

(大本山光明寺法主)

○少年時代、松阪の樹敬寺で育った頃のお盆は、楽しかった思い出である。

極暑の八月盆で夕刻ともなると、檀家の人達が、そろそろお墓参りに集ってくる。地藏堂の縁側に私達四五人が、引磬(いんきん)を手にして待っていると、誰かは招ぜられて施主の後について行って回向をするのである。親戚の人も施主として回向を頼むことがあるので、一つの墓も前後数回読経する。八時頃が最高潮で広い墓域のあちこちに、いんきんが鳴りひびき、大袈裟にいうと一種の交響楽の観を呈した。袂の重さが漸次加わって、引上げる十時前には堪えられぬほどであった。

○附近の寺々の施餓鬼の日は、手分けして手伝いに出かけることになっていた。宮田の如来寺は無住なので、私一人で行って勤めたが、師匠の肝いりで、一里過ぎの道を人力車

忘れぬことば

鷹司 誓玉

(善光寺大本願)

私共は心にどのような思いをいだいたとしてもとにかく具体的に法律にふれなければ、或いは社会道徳にもとる所なければ平然としてゐる。例えば親しい友人にも激しい対抗意識をもち時には嫉妬反感侮蔑の心が生じたりする。他人にも知られず、自分さえも気付かずにいつの間にか犯している諸々の罪は現実生活に於いて社会問題とされぬ程の実害は伴わなくとも、自ら深く省みるならば人間の罪悪性に戦慄せずにはいられない。この様な自己のみにくさに気付き、それから超脱しようと努力して行くのが宗教である。

又我々は時として嗜虐的となり些細な心の動きをも罪悪として感受するのだと「卑下」する事に慢じたり、他人に告白する事によって感傷的となったりする。しかし真の罪悪感とは信仰によって物事を正しく見る目(仏智)を得て今まで気付かなかった事が罪として自

人間というものは

柏熊 岬二

(大正大学教授・文庫)

人間というものは実に不思議なものである。その一端を紹介してみよう。

かつて私は次のような実験を行なってみた。まず空腹状態にある子供十五名を、いろいろな御馳走の乗っている食卓の前に座らせた。次に大きな樽を運び入れ、その中に食物を全部投入した。御飯も、お菜も、汁もである。それを長い棒でよく混ぜ合せ、アルマイトの器(犬の餌を与えるボールを想像して頂きたい)に盛り分けて、再び十五名の子供達の前に置いた。その上で「どうぞ召上れ」といったのである。

ところが誰も手もつけようとしな。聞いてみると「汚らしい」という。そこで説明を加えた。「樽も、棒も、アルマイトの食器も、みな消毒済です。内容も別々に盛ったものと同じです。違ふところは混ぜたか混ぜないかだけです。よく考えてごらんさい。別

で往復した。それが二三年続いたが、何だか尻こそばゆいながらも嬉しくて、毎年の夏休みの楽しみの一つであった。

新亡のある家は、新製の位牌、三つ具足、盛物台、灯籠（提灯）などを、白紙で張った机に載せて、寺に持参する風習であった。稀に灯籠の代りに台ランプもあったし、屏風を後に立て、自家の「初盆」を囲ったのもあった。それらを本堂に列べて、七日から二十四日まで供養するのであるが、夜は灯火（参燭ひょうそく）の入った灯籠の行列で明るく、寺々のこの光景を観てまわる人達のために、電灯を取りつけ隅々まで不夜城であった。

お盆には本堂の前の所に、高さ五間もあるような丸太を立てて、その上へ盆灯籠をのせ細引きをたくって引き上げるようになってい

る。灯籠は重さ三貫目もある屋根付きの角形で障子を簾めた参燭であった。ある夕方細引きをたくっていたところ、突然緒が切れ灯籠が落ちて来て私の鼻柱に当たった。幸いに氣を失うほどではなかったが、そのために灯籠は石油ランプの丸形のものに改められた。

覺され、今まで見えなかったものが明らかに
て見えて来て即今恥かしく慚愧懺悔のどん底
から生ずる願いは単なる反省絶望ではなく、
仏智他力にもよおされた自覺であり、それに
氣付く時我々と共に他力に動かされている歎
びに目ざめるのである。

本能の赴くままに行動するのを自由とか權
利とか称し、親子師弟の間の礼節を忘れ、主
觀のままに他人を批判し非難する人が多くな
った現在、社会を明るくする為には各人が宗
教的知性を涵養し、自ら謙虚にかえりみる明
晰が必要である。かつて「個人々々が自分
の生活を大切にするのはむろん結構だが人間
としてはそれだけでは足りない、少くとも足
りないという自覺をもつべきだ。人間として
見のがしてならない大切な点は明晰な知性と
奉仕とである……」とのべられた亀井勝一郎
氏の言葉は忘れられない。即ち「自分の内部
を深くみつめる眼と自分のエゴ（我欲）をお
さえて人々の為に働く心」の尊さを主張され
た氏の一文はいつまでも私の心底にとどまっ
ていることであらう。

々の食器から食べたとしても、胃の中に入れ
ば一緒になってしまおうでしょう。それを予め
混ぜて一つの食器から食べられるようにした
のですから、合理的ともいえるわけですよ」
しかし、十五名中たった一人のものが、ほ
んの少し食べただけで、他は顔をしかめるだ
けであった。

では、なぜ彼等は食べなかったのであろう
か。そこに人間の秘密を解く一つのカギがひ
そんである。そして、それは宗教にとっても
非常に重要な課題を与えてくれる。ヒントを
あげておこう。合理的な知識と非合理的な情
緒性との葛藤がそれである。或は人がなぜノ
イローゼになるかを考えて頂いてもよいと思
う。

なお参考のために附加えると、ちよつとし
た操作で子供達が嫌がったとまったく同じも
のを、喜んで食べさせることが可能になる。
その答えも前と同じヒントから導きだせるで
あらう。読者の皆さんも科学的クイズとして
一つ考えてみませんか。



供養

浄土宗門主 岸 信 宏

お盆の季節が近付いて、私は仏教の行事がこれほど深く日本の習俗にとけこんでいる姿を見て、私共の祖先の敬虔なるいとなみに対して深い感謝を捧げるものである。

この行事は盂蘭盆經に説くところの、目蓮尊者が亡き母の餓鬼道に落ちて居った苦しみを救うことの出来た故事に端を発しているのである。それがやがて祖先の霊をまつる風習となったのである。支那に於ては古く梁の武帝が大同四年に同泰寺に於て始めて盂蘭盆齋を行わしめ、それを初唐の時代に広く官民の間に行われたことが、法苑珠林第六十二にのっている。我が国では、齊明天皇の三年秋七月に、須弥山の像を飛鳥寺の西に設けて、盂蘭盆会を行わしめたことが日本書記第二十六に出ている。爾来、この盂蘭盆会は、我が国民固有の祖先崇拜の思想と結びついて、広く民間に行われる様になり、今日に至っているのである。

盂蘭盆經に於ける目蓮救母の因縁というのは、釈尊のお弟子の中で神通第一といわれた目蓮尊者が、六神通を得た時に、先ず始めにすでになき父母の恩を報ぜんとしてその在処を探し求めたところ、母が餓鬼道に落ちていゝるのを見て、これを救わんとしたのである。この母を救い出す方法を釈尊にお尋ねをした。その時、釈尊は教団の夏安居九十日間の修行の終る七月十五日の僧自恣の日（休養の日）に、十方の大徳衆僧を供養するならば、その功德によって母を餓鬼道の苦しみから救うことが出来るであろうと指示せられた。そこで目蓮尊者は釈尊の指示に従って、七月十五日の僧自恣の日に十方の衆僧に飯食、衣服等の供養をし、ついに母を救うことが出来たと

云うのである。この因縁によつて、今後誰でも現在の父母の無病息災を願い、過去七世の父母の解脱を願うものは、七月十五日の僧自恣の日に十方の衆僧に供養すべきことを説き示されたのである。

孟蘭盆とは倒懸^{とうけん}と訳されている言葉であり、さかさまにつるされたような苦しみから救う儀式のことをいうのである。今は餓鬼道の苦しみを救う法要儀式のことを施餓鬼会と称えて、仏教の多くの宗派に於て祖先の供養のために常に行われている儀式である。

印度には古くから世嗣ぎなくしてこの世を終るものは悪処に落ちるといふ信仰がある故に婆羅門の修行者は修行を終えたならば、家に帰り、妻をめとり、子を設けて、祖先の霊をまつるのである。しかるに、仏弟子は出家して家庭をいとなむことがなく、子を設けて祖先の霊をなぐさめることが出来ないから、その親は餓鬼道にうまれて倒懸の苦をうけるといふ説話を生じたものと伝えられているのである。しかし、餓鬼道にて受くると云う倒懸の苦といふことは、単に古い印度の説話でなく、現代の社会の上にも感じとることが出来ると思ふのである。今日の労資間の闘争にしても、国際間の紛争にしても、それは有るが上にも有らんことを願い、富める上に富まんことを願う所有慾の争いとも見ることが出来る。それはまたすべてのことに満足することのできない餓鬼道の倒懸の苦とも見ることが出来る。

目蓮尊者の母の餓鬼道倒懸の苦を救うために、釈尊は尊者に対して十方衆僧に供養すべきことを説いていられるのである。この釈尊の教説はどういうことを意味しているのであろうかといふことが私には長い間の疑問であつて、今も尚そのことに対する正しい理解を求めているのである。これは余りに護教的なる臭いが強いように思われ、果して第三者がこの教説を肯定するであらうか。出家教団の人々には生産性がないから、その生活は一に在家の人々の供養によらなければならぬ。供養にはいつも犠牲がともなうものである。それは持てるものが持たざるものへの捧げものであるからである。今日持てる国が低開発国の援助に多大の資金と技術とを支出しているのはまことに貴い供養であり、犠牲である。世界の各国が有無相通ずるところに世界の真の平和と福祉とがある。ここに目蓮救母の説話の持つ近代性を見ることが出来ると思ふのである。

お盆の旬

龍 淵 洞

七月の十日頃から盂蘭盆が近づいて来ると、在家でも仏壇の掃除、仏具を清めたり、盆提灯や膳部を取り出したり、盆会の準備をする。

昔は盆と正月は一年中の一番たいせつな日であったから、着物や履物まで新らしくととのえ、盆まえに家屋敷の手入れ、畳がえまでする家が多い。

遠藤 正年

野の家の畳替へしは盆用意

○
まして寺での用意はなお更である。墓所の掃除も、寺に住む者の仕事の一つであり、またつらい仕事でもあった。

足立 蓬文

墓井戸をさらふも一つ盆用意

○
お盆は普通最近では七月十三日の夕刻から十五日または十六日まで行ふ魂祭の仏事。

だが所によつては一月おくれまた旧暦の七月、或は新暦の八月一日盆と云ふものもある。

貧家の魂祭

越人

魂祭柱に向ふ夕かな

○
お正月にくらべて送り迎への期間があわただしいので、おついたちに盆が始まると考へる地方が諸所にあり、京阪地方では七日をお盆の始まりと考へているところもある。

またかつて盆の終りを二十日とし、また二十四、五日ごろとしたらしいあともあり、三十日までお盆だとして灯籠を灯

して置いた所もある。

燈籠や愁を語る酒の上

松瀬 青々

○ 祖先の霊を祭るので魂祭といい、いまは魂祭と云へばお盆のそれをさし、盂蘭盆と同義語に用いられている。

死去のために祭を行ない、その苦を免れしめる行事で、仏壇の前に霊棚をつくり、一年一回精霊が家へ帰るとされてい

向井 去来

魂棚の奥なつかしや親の顔

○ その上に位牌を移し、真菰の筵を敷いた上に、草市で求めて来た草花、茄子、胡瓜、くだもの、瓜の牛馬などを供へ麦麴や冷麦を供える。

高浜 虚子

草市や一からげなる走馬燈

○ 先祖の霊を迎へるために十三日の夕刻から宵にかけて、門口や軒下で芋殻を焚くのが迎火である、東京の近郷の農家の一部ではこの日の夕方、まず一家のものが門前に集まって藁

火を焚き、『盆様盆様お迎え申す』と大声で叫び、それから子供がその火を持って墓へ駆けてゆき、そこでも火を焚いて同じことを唱えるとか、私の育った東海の寺では、その境内の真中で火を焚き、その火を墓前に移し、また各家へ持ちかえるのである。その火と共に各家の霊棚に先祖の精霊がかえるとされている。

迎火は草の外れのはづれ哉

小林 一茶

○ 棚経は徳川期の初めに出来た風習で、お盆に僧侶が檀家廻りをして棚経を読むのは、その家に仏壇があるかどうかと云ふ吉利支丹吟味の仏壇改めの遺風が今日まで続いている。廻りきれない檀家もある。限られた時間に廻る棚経は忙しい。

小林 一茶

棚経を手前で誦んで置にけり

○ お盆の十六日を精霊を送る日として、この日の夕方、迎火の時と同じ様に門口などで芋殻を焚く行事が各地で行われている。これが送火

送り火にかがむ母子の影法師

冬 草

現代人の生と死をめぐって

—故岸本教授のばあい—

編集部

東大教授・同附属図書館長岸本英夫博士が去る一月二十五日に逝りて、すでに半年ちかい時が流れようとしている。同博士の死が、ジャーナリズムをつうじてひき起した大きな反響は、表面的には一応すぎさったかにみえる。しかし、その残した影響は、目にみえない形でつづいて起り、その投げかけた問題は、あらためて反省を要求しているように思われる。

もともと、岸本博士の死がジャーナリズムによって大きく取りあげられたのには、いくつかの理由があった。東大宗教学科主任教授という職のほか、文部省宗教法人審議会委員など、国内の学界・宗教界の要職をかね、さらにアメリカはじ

め、海外に多くの知友をもつ国際人だったからであるのは、いうまでもないが、しかし、その死因が癌という典型的な現代病であったことが、一般の人びとの関心に訴えたのも否定できない。

同博士がはじめて癌を宣告されたのは、さる昭和二十九年、客員教授としてアメリカのスタンフォード大学にある時のことであった。その時には、あと半年の命といわれながら、手術によって奇蹟的に癌をくいとめることができた。しかし、この執拗な病は、その後も度かさねて再発し、博士はそのたびに手術をくりかえしながら、ほぼ十年にわたって、

文字どおり痛と、そして迫りくる死と対決して続けられた。その雄々しい闘病の態度が、痛の恐怖におびえる現代人にアピールしたのだと考えられる。

しかし、博士の死が、一部にあれば大きな波紋を投じたのは、ただ痛による死という単純な事実によるのではない。

むしろ、それは、博士がこの不治の病を契機として、そこから次第につくりあげてきた一種独自の死生観によるのである。



された日々をよりよく生きようと決意されてから、博士は折にふれて、死をみつめ生を思うその心境を随筆、ないし手記のかたちで、発表されてきた。たとえば毎日新聞三十七年六月九日付夕刊の「死をみつめる心」、「在家仏教」第一〇〇号（三十七年七月）の「一つの宣告」、そしてほとんど絶筆となっ

た「理想」三十八年十一月号の「わが死観」など、その数はかなりに上る。とくにこの中の最後のものは、博士の遺志により、さる二月六日の東大図書館葬の当日、会葬者に配布されて、多大の感銘をあたえた。（これらは、近日中にまとめられ出版の予定となっている。）

これらの手記は、死という限界状況にさらされた一個の人間が、いかにそれと取り組み、それを克服しようとしたかをしめす、貴重な記録である。だが同時に、そこにはまた多くの問題もふくまれている。そもそも、生死の大事は、ふるくから宗教が解決すべきものとされてきた問題である。そして、多くの宗教——必ずしも全てではない——は、死後の生や靈魂不滅をとくことによって、人びとに死に臨むなぐさめをあたえてきた。キリスト教のいう「天国」や、浄土教の信じる「極楽」は、そのもっともよい例である。しかし、岸本博士みずからは、こうした信仰に安住せず、むしろそれをすてて、「今日ただいま」の生を「よく生きる」ことに、生の意義を見出されたのである。

これは、宗教——すくなくとも伝統的な宗教の立場を、真向から否定するものではないだろうか———という疑問が、一部の宗教人のあいだに生じたのは、極めて当然であった。しかも「宗教学」を生涯の仕事とし、また神・仏・基各宗教

にふかいつながりをもってきた「宗教界の權威」が、みずから宗教を否定してよいのか、という批判さえ聞かれた。さらにその葬儀が、いずれの特定宗教の儀式にもよらない「超宗教的」なものであったことも、そうした印象をふかめたようである。

前記の「わが生死観」のなかで、岸本博士は次のごとく言う。

「……私は、実は子供の時には、敬虔なキリスト教の家庭に育った。私自身も子供らしい熱心な信仰をもっていた。しかし、青年時代に私は奇蹟をおこなうことの出来るような伝統的な人格神信仰はどうしても信じる事ができなくなった。その意味で神を捨てたのである。そして、同時に死後の理想世界としての天国や浄土の存在は、まったく信じないようになった。……」

なぜだろうか。それはどこかにある「天国」や「浄土」という考えが、近代的な合理性、知性とあい容れないからである。しかし、それならば、死の恐怖をいったいどのようにして克服したらよいのか。博士は、その体験にもとづいて、「死」の恐怖はじつは錯覚にすぎない、死とはただ「別れの時」なのだという。

「死というものは、実体ではない……。死を実体と考えるのは人間の錯覚である。……これを裏返していえば、人間に実際与えられているものは、現実の生命だけだということである。……死というのは別の実体であって、これが生命におきかわるのではない。ただ単に実体である生命がなくなるというだけのことである。このような考え方がひらけてきた後の私は、人間にとって何よりも大切なことは、この与えられた人生を、どうよく生きるかということにあると考えるようになった。」

与えられたつかの間の命を、いかに充実して生きるか——それは、とくに痛という不治の病を背負わされた博士にとって、最大の課題となった。

「……私は、このギリギリの限界状況まできて、逆に、大きな転回をして、生命の絶対的な肯定論者になった。死を前にして大いに生きるということが、私の新しい出発になった。……死は、生命に対する『別れの時』と考えるようになった。立派に最後の別れができるように、平生から、心の準備を怠らないように努めるのである。」

博士の手記は、ここで終わっている。この手記は、三十八年十月、博士のさいごのアメリカ旅行の出発前夜、ほとんど徹夜であわただしく書かれたものなので、あるいは充分に意をつ

くしていない所があるのかも知れない。しかし、いずれにせよ、生前の博士を知る者は、博士が身をもって、ここに書き記された生き方を実践しておられたことを想起することができるのである。

死後の世界を信ぜず、一日一日をよく生きる——それは、けっして生を享樂するということではない。痛に侵されて明日の命もしれない者が、どうして享樂的な気分などにひたることが出来るだろう。「よく生きる」とは、むしろ、全力をつくして為すべきことは為し、果すべき義務に身を献げることなのである。事実、博士は、その晩年の10年ほどを、常人も及ばぬほどの意志力によって、あるいは研学に、あるいは国際文化交流の仕事に、そしてまた図書館の近代化等の仕事に、捧げられた。しかもその間、博士の言行は、死を宣せられた人間の暗さなどは露ほどもなく、近親や門下の人びとがそろって証言しているように、ユーモラスな明るさにあふれてさえいたのである。

すでにのべたように、こうした岸本博士の生死観は、その劇的な最後ともあいまって、人びとのあいだに大きな波紋をなげた。その生き方に共鳴する者も少なくなかったが、また、反撥や批判もなくはなかった。とくに伝統的な宗教のな

かにある人びとからは、死後の「天国」や「浄土」は存しないとはっきり言いきるその立場は、うけ入れがたいものにみえたようである。「天国」や「浄土」をしりぞけるととき、博士は、主として近代的な知性をよりどころにしているが、はたして知性がすべてであろうか。浄土の信仰には、頭だけでは割りきれない、情操の要素があるのではないか。

しかしまた、ほかの見方からすると、死を予期しながら、一途に義務の遂行に精進した博士の生き方のなかに、ある宗教的な諦観ともいえるべきものがあつたことも、争われない。じじつ、死にのぞんで「今日をよく生きる」というその情熱は、つねに「臨命終時」の覚悟を要求した一遍上人や、四六時中全力をつくして仏道を学ぶべきことをさとした道元禪師の精神につうじるものをもふくんでいる。ここからして岸本博士のなかに「あたらしい宗教的生きかた」の典型をみようとする人びともある（『在家仏教』第一二〇号、三八年三月号）

いずれにせよ、岸本博士は、ある意味で、現代の知性人の一つの典型といえることができる。幻想にようとなく、真向から死ととりくんだその態度の厳しさは、賛否はともかくとして、襟を正さざるをえないものを含んでいる。ただ、その投げかけた問題をいかに解くか——それは、われわれ各々にのこされた課題であろう。

岸本さんの告別式

大正大学学長・文博

佐藤密雄

岸本さんの告別式は寒かった。寒明けの二月六日であって、お天気は良かったが、式場の東京大学図書館は、そのいかめしさに相当する冷たさを感じさせた。私の近くに御出になった長井真琴先生の椅子が、氷のような大理石の床面を滑って、八十幾才であられるか、老先生が床に落ちれて、はっとしたが、別にけがということもなかった。このために、一刻の、ひそひそとしたざわめきがあったが、これが終ると一層冷く静まりかえった。

東京大学図書館葬であるから無宗教の告別式でなくてはならないということとは、私には納得の出来ないことであつたが、然し、今度の場合だけは、岸本先生御自身が特定の宗教に依らない告別式を求められたのであるから、はからずも故人の意志に合したことになる。

岸本先生は、生前に私共が接した感じも親切で、また先生について書かれたものを見ても、人間的な情味のあふれた方であつた。然し、学問についても同様であつたと考えられるが、死に対する考え方は、



最後のおしえ子にかこまれて

非情で理性的であつて、冷徹そのものであつた。自分の死について、一片の感情的欲望をもさしはさまぬことは、容易のことでは出来ない。

現代は、人間が自己の知性に確信を持つに至つた時といえるが、岸本先生はその代表であつた。死後に極楽や天国等のあつて欲しいことは、人間が死を知つて以来の悲願であるが、この存在を確実化するものは信仰であり宗教である。宗教は、人間の知性を超えたもの、人間的知性を「世間虚仮」として否定する。然し、人間を確立する現代の學問に基づく知性は、人間的知性を超えるものを認めない。そのような立場に立つ學人岸本さんは、死後の世界を認めず、死は身心個体の消滅することとされた。或いは色即是空に徹せられたともいふべきか。

人は、理性的には死後の世界を否定しつつも、然も感情的にはそれに徹することが出来ずに懊悩する。そこを、先生は理性に徹せられたのである。これは、信仰以上に、一般人に

は出来難いことである。

寒い式場は、理論理性の冷厳さそのもののように静まり返つたが、やがて式典が始まると、人間的な熱がみなぎつて、寒さは忘れられた。読経がないから、式辞について弔辞があつたが、そこに述べられたものは、先生が迫る死を見つ、決死の活動をされた事業であつて、そこには、極度に熱せられた人間的感覚があふれて来た。非情な告別式に人間的熱情が湧いて来た。そして最後の、門下生の代表の弔辞に至ると、それが温い宗教的情感に変わつて来たが、これが終つて、東大生の葬送曲が奏せられると、私共は極めて敬虔な、宗教的な祈りの気持を以つて祭壇を見上げたのである。

来世的宗教を否定された人の、非宗教的な、非情ともいふべき告別式が、不思議にも私共に最も宗教的な情感にみちたものとして終つた。私はそれを意味づけようとして、此の一文を書いたが、何んと意味づけようか、ついにそれを見出すことが出来なかつた。

我 無

著者明徳本松

リヨカ何とは私

無我とは、もろもろの 不変の我はないのだと言う意味で、忘我では因縁関係の中に生みださない。厳然としてここに現われている「このれ、生かされている我で 私」を否定するのではなく、その真の姿が諸あるから、一切から離れ 縁起生の「私」であると観るのである。た我、絶対的個我、不動 この縁起の理念で万象を觀すれば、すべては

相依相関の境であり、孤立固定した存在はない。この意味において一切は空なりと言わざるを得ない。この場合の空は虚無ではない赤は赤、白は白、森羅万象は森羅万象であつて、ことごとく虚無でない。

西 村 常 純 僧 正

高 橋 良 和

(中外日報取締役)

佐賀市の西村常純僧正は、みるからかっぷくある人であった。ちりめんの兵子帯でもしめてステッキについて散歩をしていると、どこかの御隠居さんといった感じであった。それもその筈で佐賀市の大坊福念寺の御住職ではあるし、宗内における要職にもあった人であるだけになかなかゆとりとした落ち着いた風格であった。時々京都にきては三条辺の大文字屋という旅館に泊っては一週間ほど滞在して、骨董集めに日を費し、食道楽であちらこちらと一流の料亭

で人を饗応するのが好きであった。わたしなどは若い頃からその案内役であちこちとつれてもらったものである。そういう人であるのに般若湯の方は全然だめで、昔はジュースがなかったから、サイダーをのみながらよくおそくまで人の接待をしたものだと思心させられたが、そういうわたしも左ぎきでなしにサイダー党であったから、その加減で同伴をしたのかもかもしれないと今考えるのである。この老僧正は東京への行き遣えりには必ず京都に立ち寄ったものであるが、いつも細いステッキについて、夜の町には粹な着流しでブラリと出かけるのである。狭いようでも佐賀市より広い京都で、この西村僧正にはちょっと息をぬくにはもってこいのところだったらしいのである。

ところがある日のこと、この老僧正がわたしに風呂屋に案内しろというのである。風呂なら旅館にあります。といったところ、そうじゃない町の風呂屋につれて行けということ、それも京都で一ばん大きい立派な風呂屋につれて行けという注文である。「風呂に入るのですか」とたずねたら「いや一寸しらべるのである」との返事である。今さら風呂屋の勉強でもあるまいと思ひながら仕方がないので京都の中央にある一ばん大きな風呂屋のさくら湯というのに案内したのである。

「ここです」と案内して、わたしも入浴しなければならな
いかと思って、ノレンをくぐってみると、この老僧正は風呂
屋の番台のところに行つて、ちょっと主人にものをたずねた
いということである。番台の女の子もおどろいて、一体何事
かと思ひながらも人品の卑しからざるこの老僧正を上から下
までみながら奥に入つて主人を呼んできたのであるが、わた
しにとってはその
主人がくるまでの
てれくさはちょ
っとたとえようも
ないのである。裸
になつて風呂に入
るのならよいが、
みんな裸のなか
に、ポツんと風呂
屋の番台の横に立
っている姿はあまり恰好のよいものでないので、男湯であつ
たのが幸で、これが女湯であつたらへんな目付きでみられた
のではないかと思うのである。やがて、さくら湯の主人が出
てきて、あいさつを交わした。西村僧正は初対面ではあつた
が風呂屋の設備や経営客筋などを一つ一つ熱心にメモしなが



らこの主人にたずねたのである。税務署の調査ならいざ知ら
ず、一体全体何事かと横にいるわたしも不思議でならなかつ
たのであるが、この西村僧正は、自坊の福念寺でこの風呂屋
を經營するという計画を胸に秘めてのさくら湯の訪問であつ
たのである。そのときのことを今もおぼえているが、「大体
一日に何人ぐらい風呂に入りますか」という質問に風呂屋の
主人は、「一日三千人くらいは入ります」と、答えると、西
村僧正が「うーん三千人——」と目を白黒した姿が今でも浮
かぶのである。

「高橋さん三千人一日に入浴すると經營は成り立つやろ、
わしは民衆の福祉のために風呂屋を佐賀でやるつもりや」
さくら湯の訪問が無事終ると西村僧正はこう語つたのであ
る。それからしばらくして佐賀市に珍らしいお寺が經營する
風呂屋が生れたのである。もちろん、西村僧正の經營である
茫洋として雲に乗る如く、全く浮世離れのあの風格がとて
も人なつこいのである。金ブチの眼鏡をかけて、ひょうひょ
うとしたなかにも、好きとみるや数万金をさっと投げだして
やる。その代り借金も平氣、宗門のためなら千万人といえど
も吾行かん、という信念の人であつただけに今日の時代に達
者でいたら宗門の歴史に面白いものを残したのではないかと
思うのである。

夢の堂本新

成 舜 佐 土

(神戶阿彌陀寺住職・保護司)
(西欧仏教々団日本理事)

当寺は終戦前、即ち昭和二十年八月六日未明戦災焼失したものです。以来鋭意復興に努力、仮本堂、書院、鐘樓堂と再建し、今般待望の本堂を復興したるものです。

一、企画

先ず再建に先立って儀式中心の本堂とすべきか、集會中心の本堂にすべきかを当寺役員と種々論議した結果、仏教の將來性、世界性を考慮して、伝道集會中心の本堂にすべく決定、この点を基本線として去る三十七年一月(株)竹中工務店神戸營業所へ設計・施工を依頼することとなりました。

設計は同年十一月上旬に決定、その間当寺役員、又は施工者と打合せすること実に六十数回、最終的に同社本社設計部長岩本博行氏(国立劇場設計者)の案により写真の様なデザインで御願いすることとなったわけです。着工は同年十一月二十二日、竣工は翌三十八年十月中旬、同二十日に落慶法要の運びとなったのです。

設計者としては古い仏教建築は中国から日本に入ってきた、日本の材料によって一つの様式に統一されて来ましたが、近代では材料も新らしいものになって来ましたし、これらの素材によって仏教建築を如何に表現するかに御努力下さったようです。

岩本氏は仏教徒の合掌の形を選ばれた事です。これにより従来の寺院建築にあるナイーブなそりを持った美しい屋根の形を生かし、空間にそびえた、しかも安定した形を作り上げられた事です。正面の横巾と高さの比は黄金分割により、高くそして裾の広がった安定した形は見る人に落着いた感じと敬虔なる念を起させるものと信じます。

さらに設計者は、若い人にも親しみやすい感じを与える為、伝統によりながらも、新らしい形と色彩の配合、明るさに注意されたようです。

尚当寺としてロビーを設けることを希望し、参詣者の休息の場とする意味にて向拝入って外陣までの間に設置しました

二、構造

鉄筋コンクリート造の八間四面、屋根は銅板を葺き、半永久的に美しさを保たせ、内部は広い外陣に中央のアルコーブに内陣をとり、内陣は菩提樹の葉をかたどっており、左右の脇壇は雲にかたどってあります。

色彩は白・黒・赤・金を基調とし、日本古来の色に統一、外壁は白、木部のステインには黒、内陣の天井、壁、扉は全て金箔にて、外陣は赤いジュウタンを敷き椅子席、坐りの兼用とし、ロビーには磁器タイルを敷き（黒色）、裏堂には通



(新築本堂全景)

路、講師控室等を設けました。

三、運営並びに伝道行事

境外地基本財産を一部処分し、加えて檀徒、信徒の浄財を募金、仏陀、元祖上人の御加護により国際港都にふさわしき

殿堂が再建されるに至ったのであります。

■当寺は寺内墓地は大正七年鉄道の拡張の為、共同墓地へ移転、従って境内墓地なく、いきおい伝道にその要点を集中せしめねばならぬ寺院であり、毎年七月の夏季大学宗教講座、外人仏教徒による講演会、さらに著名講師による仏教講座を始め、ウエサカ祭、塾、文書伝道、視覚伝道等により、又近き将来に於いて国際港都なる故に諸外国人居住者多く、築地本願寺の如く、外人向けのデボウシヨナル・サービスを定例として実施したく努力いたしております。

〔復興後感〕

寺院建築としては従来の様式を全たく脱皮し、恐らく国内諸外国でも見られない独創的な思切ったデザインにて、しかも東洋的伝統を生かしつつ、近代적要素が実に良く調和され、寺院建築史上に新機軸を生み出したものと云えましょう。又国鉄に沿っており、車窓から朝に夕に通勤者をして敬虔なる念を起こさせるものと信じます。

加うるに、この様式を誰一人として異存なく受入れて下さった当寺総代、役員、檀信徒各位の仏教に対する進歩的な考え方と、併せて施工者の献身的御努力の賜ものと心から泌々と味わっております。

合 掌



(落慶法要風景)

大客殿を完成した創価学会

長逝去後の七年目で大客殿ができ
たわけで、次の七年目に又大きな
躍進があるのだという事で信者を
躍らしている。

創価学会が十五億円の巨費を投じて、大

最近、世帯数もぐんと増したと称する学会

客殿を完成し、四月一日にその落成式を挙

は、更に組織を拡大して、四月二十日の発表

行した。建築面積は約四千五百平方メー

では、全国

ル、高さ三十メートルもあり、五千人はら

に総本部

くに収容できるという巨大で荘麗なもので

二、本部四

ある。これの礎石には、世界四十七ヶ国の

十二、総支

小石が埋められているといわれ、戸田二代

部一六〇、

目会長の遺志をついで、池田現会長が、会

支部八五六

員の寄附金をもとにして、建てたものであ

としてお

る。

り、世界的

丁度、戸田会長の七回忌に今年は当り、

な拡がり

落成式には、文部大臣や、東京都知事まで

なってい

でかけるといふ、馬鹿馬鹿しく華やかなも

る。そして、

のであった。そして、今年は三百万総登山

毎日の様に、全国の各地で本部、或は支部、

と称して、全国から三百万の信者を此の客

日蓮正宗寺院の為の地鎮祭や落成式が行われ

殿にあつめ、世界広布を目ざして、新たな

ている。そして終に、池田会長は、次の衆議

信者教育と活動をめざしている。何でも、

院選挙に打って出ることを明言した。すべて

彼等のいうことによれば、七年目毎に大き

が来るところまで来たという感じであるが、

な学会の波が来るらしく、今年は、戸田会

此の際、われわれは、更にこの事実につい



て、思いを新たにせねばなるまい。

巨大な大客殿には、会員の血のにじむ様な
金が注がれている筈であり、表面的には大き
な発展の様ではあるが、そこには生活にあえ
ぐ名も無い民衆の生活があることを見逃して
はならない。巨大なものができればできる
程、下積み of 信者の犠牲が強いられている事
実は無視できない。だまされた大衆がいるの
である。しかし、一面、そうした大衆を結集
する組織力の巨大さと、絶えず信者を引きつ
けて行く努力をも、又見逃してはならない。
いよいよ衆院選に出るということは、余程
の確信あつてのことである。そして、或る政
治家は、この結果について、相当の成功を予
想し、おびえている。それが現実のものとな
っていくとき、権力をかさに着た彼等の仕打
ちが、どんな形で既成仏教に寄せられてくる
か分らない。われわれは、この事実を、もっ
と注目し、打つべき手をどんどん打たなけれ
ばならない。



火 送 り の 文 字 大

呂 麻 富 口 樋

文 と 絵

京のお祭りというよりも、昔から日本の三大祭りの一つと云われている、京の祇園祭りが七月に行われて、やがて八月の八朔もすぎるとほどなく盂蘭盆を迎えるが、最後の夜の大文字の送り火は、京の市民がもつとも楽しむ行事であつて、今や阪神方面はもとより遠隔の地より、バスや乗物の見物客でその日は京の市中は大賑いである。

街の家々の二階座敷や物干台、又は鴨川添いの床は勿論のこと、鴨川の堤は黒山の人出である。暑い夏も間近い涼しい秋風の訪れを待つ、実になつかしい風情の行事である。盂蘭盆の精霊を送る聖火は、数百年の

大昔から行われているようだが、如意嶽の大文字の他に、妙法、船形、左大文字、鳥居の形をした五つの山の火が、京の街の東北西と、八月十六日の夜の八時頃から順次点されてゆくので、毎年この瞬間見物の人達はうっとり火の消える迄、しばし恍惚境に入るのである。

しかしこの大文字の伝統の火に就ても、幾多の異変を経てきているようだ。私の知る範囲では今度の戦争中は割木入手困難と人手不足の為に、しばらく中止されていたが、地元の保存会の尽力で戦後割合早く復活されて市民を喜ばしめているが、経費その他のことでここ数年は毎年いろいろと問題が起きている。それについて昔からこの大文字点火の裏には、京の旧名家である鳩居堂歴代の主人公の好意により長年にわたる、伝統の火を守り続けられた佳話が伝えられている。それは何んでも安政の頃大文字の点火に奉仕していた如意嶽の麓の浄土寺村民達が当時の不景気のため経費に困り果て約十年程点火を中断していた時のことであつた。ところが丁度当時御所の出入りを許されていた、筆、墨、香商人の七代目熊谷直孝氏が、この中止をなげき大文字の送り火が御所の紫宸殿の御池に映ずることになつていたので、孝明天皇に御賢に入れ、至上の御感を御慰め奉るためと、直孝氏の家業である筆墨に因縁の深い弘法大師への帰依。即ちこの大文字の



大の字が弘法大師の筆になると伝えられているので、大師への信仰心と重なって一念發起され、直ちに独力で荒廃した文文字山の道を掘り直して大修理する等、同氏がスポンサーとなって、割木人夫等日当一切の経費を一個人の手で出費し久しく跡絶えていた大文字の送り火を見事復現されたのである。今に想えば実に剛腹な奉仕精神の鏡の様な御仁だったと偲ばれる、京の歴史を飾った立派な人物であった。

この直孝氏は明治九年に没せられたが、当時の法然院の庄屋中村氏宅に宛てられた直孝氏の書簡が今も多く残されているそうである。庄屋始め地元の人達がその感謝の心持ちを表現する為に、野菜や鹿ヶ谷かぼちゃを年中熊谷氏へお届けし、同家の下肥一切を取り

に来るならわしになっていたそうで、商人と百姓とのうれし
いつながりが大変快よく思われる。つづいて熊谷家では八代
目直行氏、九代目直之氏、十代目現当主の直清氏へと、明治
大正昭和三代の久しき間同家が奉仕されていた。しかし又も
や今次の大戦が起り物資と人手不足の為遂に再び中断のやむ
なきに至ったが、先に述べた地元の庄屋の後裔の中村九郎衛
門という人は、昨年死去する迄鳩居堂の下男としてお店で働
いていたそうで、又鳩居堂もその後水洗便所に改造されたり
して、下肥え取りも必要なくなつて、今日では大文字と熊谷
家との因縁も伝説の中に包まれて了まつたのだが、知る人ぞ
知る京の歴史の一頁を埋める物語である。

さて大文字の送り火は見る所によってその趣きが大変違つ
て興味がある。私が以前浄土寺に住んで居た時は、あまりに
山麓すぎて全然火も見えず、吉田山の上に登って拝んだもの
で、その後御所の中や鴨川堤、中京のビルや学校の屋上や、
知人の物干等年毎に場所を移動して楽しんでいるが、五山が
つぎつぎと点火されてゆき、いつの間にか火も弱わまり消え
て、元の闇に返る時、ホットしたような又一沫の淋しさを感
じるのである。一度鷹ヶ峯より大文字を拝んだ時であった。
ここからは他の山の火は望めないが、その夜は月もなく闇の
中に遠く東の中天に大の字だけが、くっきりと浮出されたが

ほどなく闇に消え去つたその時の実に美しい印象が第一でな
かつたかと思う。

前後したがお盆の十六日八時を中心にボーンと寺々の梵鐘
が鳴ると、如意ヶ嶽山腹にある大師堂で行われるお施餓鬼が
終り、すぐ大の字に点火されることになっている。しかし平
安神宮辺りから拝むと近かすぎて、点火合図の懷中電燈の点
滅が見えたり大の字の赤い焰の上に白い煙が見えたりどうも
よくない。又或冬の雪の日に大の字が白雪で描き出されたこ
ともあった。いつか皇太子か皇女の御入洛の時小学生が、白
昼日の丸の旗を持って大文字山で大の字を描いた白昼異風景
もあった。

又大文字、送り火の翌朝は山の穴に残つた薪木のから消し
(燃えかす)をもらいに大文字山へ続々と登山する風習があ
る。なんでもこのからけしを家の出入口に、包んでつるして
おくと脳の呪いになると云う話である。現今では地元と市の
協力によって行事が催されているようだが、観光客は年々増
すばかりで、全く今では信仰行事から観光事業に移行してシ
ョウ化されつつあるようだが、宗教家はこの行事に乗出し
て、盂蘭盆の意義を風俗に周知さすべき、いいチャンスなの
ではあるまいか。

御法話をいただく

五逆の罪人をあげてなお往生の機におさむ。いはんや余の軽罪をや。いかにいはんや善人をやと意えつけければ、往生のうつはものにきらはるゝものなし。かるがゆへにひろく通ずといふ也。(往生大要抄)

お念仏を唱える人は必ず往生できるということに、横の広さと縦の広さがあると、上人が説明されました。横の広さというのは、人の善悪に関係なく、お念仏を唱えれば善人でも悪人でも同じく往生できることをいいます。縦の広さというのは、時代の相違に関係なく、お念仏を唱えれば現代がいに末法万年の悪い時であっても往生できるということです。このご法語は横の広さについて申されたお詞です。

極悪といわれる程の悪人でも往生できるのですからまして善人が往生できぬわけがありません。「うつはもの」は器物のことで、往生という入れ物からもれることがないというわけです。

このご法語はよく、親鸞上人の申された言葉と比較されます。歎異鈔にこうあります。

「善人なをもて往生をとく、いはんや悪人をや。しかるを、世のひとつねにいはいく、悪人を往生す。いかにいはんや善人をやと。この条、一旦そのいはれあるに似たれども本願他力の意趣にそむけり」

そしてこの言葉を以て法然上人のお詞を批判したものとしたり、又は法然上人のお詞を更に一步前進させたものであるという人があります。しかしそれは間違っています。なるほど言葉の上からだけ較べれば、あるいは反対意見のようにとられ易いのですが、親鸞上人は決して法然上人を批判していません。

この両上人のお詞は、超倫理の信仰の世界を説かれているものであります。親鸞上人が「世のひとつねにいはいく……」といわれたのは法然上人がいかに他力本願の趣を説かれても世人はその本意がのみこめず、何とか善人になるよう努力し、その努力と往生を結びつけて考えているということを申されたのであります。人の目からみるからこそ善だ悪だと区別され易いが、阿弥陀さまのお慈悲から

すれば似たようなもので差別がありません。まして自分が善人だから等と思い、それを意識するようでは他力本願の信仰になりきっていないのであります。

歎異鈔の文をもう少し引用すれば

「煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死をはなるることあるべからざるを、あはれみたまひて、願をおこしたまふ本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる。悪人もとも往生の正因なり。よって善人だにこそ往生すれ、まして悪人はとおほせさふらひき」

とあります。

法然上人は、悪人といえどもお念仏を唱えれば必ず往生できると知って、悪人ぶったり反省を怠ったりしてはいけないといわれました。お念仏を唱える時に、自分が煩惱具足の凡夫であるとの深い内省がともなわなくては往生できないという善導上人のお言葉を忘れてはなりません。こうした前提があればこそ世間でいう善人が往生できるなら、悪人だといれを知った人の往生に疑う余地がないということがあります。

「狩人」と「からす」と「へび」

かり うど

北村謙順

小さな親切運動というのを聞いたことがあるでしょう。東大の学長さんが言い始められたのが今日では全国に広がって参りました。

大へん、うれしい、よい事です。ある学校では、生徒会で話し合って、全校で親切運動をしている処もある位です。とてもうれしいことですね。でも仲々むずかしい事です。

「オレは親切にしてやったんだゾ」ということが鼻に出たりすることもありますからね。

してやったともしたとも思わない親切——それが本当の親切ということではないでしょうか。そして親切を受けた方は、その親切をいつまでも忘れない心掛けが大切なのでしよう。

昔、インドの山の中に、一人の坊さんが修行をしていました。山の中でも長い間には色々の事に出会いました。ある時には、迷い込んだ狩人の男を無事に山の下へ帰してやったこともありましたが、又ある時には、傷ついた鳥を手当して元気にしてやったこともありましたが、亦、へびが叩かれていたのを見て頼んで助けてやったようなことも起りました。

ある日、お坊さんは、村や町を回って、あ

る家の前に立ちました。出て来たこの家の主人の顔を見てビックリ。この主人は、いつそや助けてあげた狩人だったのです。それなのに主人は知らん顔で云いました。

「何か上げたいけれどもな、今の処、生憎と米も金もないのじゃ。お前処じゃない、こつちが干ほしになりそうじゃ」と云ったかと思うと、入口の戸をビシャツと閉めて、サッサと奥へ引っ込んでしまいました。お坊さんは別にくやしい顔もしないで合掌すると丁寧に頭を下げました。

お坊さんがお腹を空かして道端に立っているのを見た鳥がありました。この間、山の中で傷を手当されて助からぬ命を助けて貰ったあの鳥でした。鳥はサッと向きをかえて、お城の方へ青空を切って飛んで行きました。口は間もなく姿を現わしてとんで来ました。口にくわえて来たものがキラキラと七色に映えました。宝石です。然も大変な宝石をもって来てしまったのです。お姫様の馬飾りの宝石なのです。御恩がへしがしたい鳥としては、せい一ぱいの仕事だったにちがひありません。

「お坊さま私をお忘れでしょうか。私は山の中で助けて頂いた鳥です。大変にお腹がおすきの様でも、私の運んで来る食べ物では、高が知れたものです。そこで私は今、宝石をくわえて持って参りました。これならお金にもなりますし食物も沢山買へます。どうぞ私のほんの気持でございます。どうぞお受け下さい」と云ったかと思うと鳥はパッと宝石をおいて、飛び去りました。

お坊さんは、鳥の後ろ姿をジッと見上げながら合掌していました。我れにかえって坊さんは一人言のように云いました。

「成程、鳥の気持は感謝しきれない程、うれしいが、然し何もなくて私同様お腹をすかせている人が沢山……ウムそうだ、先程の御主人もそうにちがいない」

あの主人の憎々しい仕打ちを忘れてしまったかのようにこの坊さんは、又、家の前に立ちました。坊さんの掌の上の宝石はキラキラと相変らず美しい光でががやいていました。

「先程参りましたが、あなたはお米もお金もないと仰いましたな。実は只今こんなものを頂きましたが、私如きがもつものでは

ございませぬ。あなたに差上げますから、どうぞこれで充分にお米を買って下さい。」差出した宝石を見た主人の洪顔はどこかえ吹きとんで、今にも崩れてしまいそうな恵比須顔。

「いやー、はっはっは……これはどうも」お坊さんに向って最敬礼。頭を上げた時にはもうお坊さんの姿は見えませんでした。

ところが、次の日になって、これが大変なことになったのです。お姫様の宝石が失くなったということ、探し当てたものには褒美をとらせるというおふれが出たのです。正しく昨日、坊さんが呉れた宝石がそれにちがいありません。するとあの坊さん泥棒をしてそんな坊さんでもないのだが……だが待てよ、私だけが届け出ると、私が盗ったことになつては大変だ。よしあの坊さんを一緒に連れて行くことだ。そしてあの坊さんを泥棒にしてみまえばいい。すると宝石を届け出た褒美と、宝石犯人を見つけた褒美と……しめしめそうしよう。欲に目がくらんで命の恩人にあだで返す主人は、早速町中を探して坊さんを見つけました。そうして坊さんをお城へ引

っ張って行つたのです。

「王様申し上げます。この坊主奴は泥棒でございました。お城から宝石を盗んだのはこの坊主に間違いありません。」

王様はこれ聞いて本当と思ひ顔を真赤にして奴鳴りました。

「とんでもない奴じゃ。これ大臣この坊主を厳しく処罰せよ」

可哀いそうにお坊さんは大変なことになつてしまいました。でもお坊さんは、本当に自分で盗つたように、静かに王様の声を聞いているばかりで一言も申しわけを云いませんでした。お坊さんは処罰を受けようと思つていたので。若しお坊さんが本当のことを云えば、鳥が殺されることになるからです。あの鳥ばかりでなく、事によつたら鳥という鳥の命が何千、何万となく殺されるからなのです。

お坊さんは、生きうめの刑を受けることになりました。町の真中を走る大通りに穴をほり首だけ出しておく、生きうめの刑です。お坊さんは命が絶えるまで、人の足にふまれ、泥にまみれ、雨にぬれねばなりません。お坊

さんの顔から血が流れ、泥でよこれ、飢えて気も絶え絶えになっていました。あと三日の命でした。

この姿に驚いたのは、いつか村里で親切に助けて貰ったあのへビでした。恩人の変りはてた姿にへビは何としてでも助けたいと小さな頭を痛めて考えました。しばらくしてへビはニヨロニヨロと歩き初めると、お城の中へ入って行っただです。事もあるうに王子様にかみついて来たのです。王子様はへビの毒がからだにまわって死んだのです。お城は大変な騒ぎになりました。医者という医者、名医という名医が次々とお城の門を入って行きましたが、ついに王子様の命はとりもどせませんでした。王様は気がいのようになって王子の名をよび続けましたけれども王子は目を開けてくれませんでした。王様の山のような黄金も何の役にも立ちませんでした。

そして三日目、悲しい王子の葬式の列が静



えるであろうこの自分のことを忘れずに来て呉れたへビの気持がうれしくてお坊さんの目から涙が溢れておちました。

「よく来てくれたの。ありがとう。もう私はいつ死んでもいい。」

「とんでもありません。あなたをお助けしたいと思って来たのです。急いで申し上げます。ここに薬があります。あなたがのむのではありません。今、王子様の葬式の列がここを通りますから、あなたが王様に声をかけるのです。私が王子の命を助けて進ぜよう、と。ねいいですか。では」

へビはさっと横の道へ入ってしまいました。咳ばらい一つしない葬式の列が愈々お坊さんの生きうめの近くへさしかかりました。その時です。生きうめの首から声がひびきました。

「王様 お妃様 お止り下さい。私が王子様の命をお助けしましょう」

「おお 誰じゃ 何処じゃ」

「生きうめ奴にございます」

「お、お前は宝石泥棒じゃな。泥棒のくせに生なまいきなことを申す奴じゃ。お前等のい

うことがあてになつてたまるものか」

王様は吐き捨てるように云いました。

「王様、実はここに薬がございます。だまされたとお思ひになつても結構ですから試みに口の中に入れて上げて下さい。」

「うーん、それもそうじゃ。たとい薬がきかなくても元々。若し万一にも本当に効く薬であつたとしたら……よし。だまされたと思つてためして見よう」

その時、お姫はもう車をおりてお坊さんの処に行っていました。子を思う母親の氣持でありましょう。お姫は自分の手で薬をつまむと、つめたい王子の口の中にお入れになりました。真剣な王様の顔。お姫の顔。三分。五分。十分。どうぞ生きかえつてと一心に祈る姫の心が通つたのでしょうか王子の顔に赤味がさして、ついに王子の命が生きかえるという不思議が起つたのです。悲しみはよろこびに変わり、泣き声は万歳のどよめきに変わりました。そしてそのよろこびを与えて呉れたものは外ならぬ生きうめの刑を受けて、人々の前にさらされていたお坊さんであつた訳です。早速お坊さんは穴から助け出されました。

そして改めて王様は、お坊さんから本当のことを聞き、自分の愚かさはしました。

お坊さんは王子の命を助けた大恩人として王様から尊ばれましたが、そればかりでなく鳥やけだものの命まで尊んだ人として永く国

中の人々から慕われました。

でも、お坊さんは、あの自分を助けてくれたへびや鳥の事をいつも忘れませんでした。

(六度集経より)

四つの心

人の心の中にはいろいろな性質が一緒に住んでいて、大ていは長所と欠点を合せ持つてゐる。しかし大きく分ければ、人には四つの心がいろいろと組合せとなつていて、その人の性質を作り上げてゐる。

第一には、きまぐれで何事にもすぐに腹を立てる心である。これ理性と感情とのつり合いがとれてゐるかどうかできまる。しかし腹をたててしまつては、折角の理性も役に立たないものとなる。

第二には、欲深い心である。富でも権力でも、これでよいと云う事を知らないで、次々と何んでも欲しがる心である。これは自分を抑制出来ないからである。欲の深い

者が一人いるとそのため多くの人が迷惑するものであることを知らねばならない。

第三には、他人を羨む心である。他人の位置や名誉をみて、わけもなく羨んだりねたんだりして、他人を尊敬する事を知らぬ心である。他人を羨む心が出ると、そのために自分の値うちが増々低下する事に気がつかなければいけない。

第四には、施す事を知らぬ心である。財物を恵もうとせず、また善い工夫や智慧を分か合う事をせずに、自分だけの満足に生きて行く心である。自分だけがよければ他人はどうでもよいと思う心で、社会は自分だけの為にあると考えるためである。しかし一つの施しを惜しむと、百の施しを受けられないことを考えねばならない。

終南山の善導大師

牧 田 諦 亮

（京大人文科学研究員・文博）

（一）

玄奘三蔵の墓塔のある長安大興教寺は、いまの西安市街の南方約三十キロほどの小高い丘の上にある。そのあたり一帯は少陵原と呼ばれ、千年の昔、唐の首都として世界的にも栄えた長安の都城からは、なやや南郊にあったため、古来名勝の地として知られていた。この少陵原や神禾原をへだてて遠く霞む山々、この山々が海拔一七〇〇メートルから二〇〇〇メートル以上もある終南山の連峯である。長安の街自体が海拔四〇〇メートルもの高地にあり、その上、この小高い丘の上から眺めおろすのであるから、見た目にはそれほど高い山とは思えない。時の皇帝が仏骨を長安の宮中に壇を設けて祀ろうとしたのを諫めて、かえって南シナに流謫された韓退之

（愈）が、「潮州に貶せられて道八千、雪は藍関を擁して馬すすまず、雲は秦嶺に横たわって家いづくにか在る」と歎じた、藍関も、秦嶺も、実はこの終南山山脈の一部である。終南山といえば、私ども浄土教徒にとって、まず思い出されるのは終南山に住み、ひたすら凡夫往生の念仏業を勸化された善導大師のことである。唐代いな中国における最大の訳経三蔵として、また孫悟空の西遊記の主人公としての民衆英雄三蔵法師の墓所から、少陵原、神禾原を見おろして、近くに樊川が流れ、終南山との間に境界線を布いている。九月末というのに山は春霞みのような、一四〇〇年来変らぬおだやかな姿を私達に見せている。塚本善隆博士は、感きわまったような歎声をもらして、私に話しかけられた。

「善導大師の二河白道の喩をみると、どうしても、終南山の前方か、そのあたりに河が流れていたに違いない、二河白道の喩は大師の空想ではなく、現実に流れている河を見て、あの喩を説かれたに違いないと思っていたが、ほらあそこに河が流れている。」

その河は末は黄河に注ぎこむ樊川の流れであると、興教寺の僧が説明してくれた。

善導大師と二河白道の喩、浄土教徒であれば誰一人知らぬ人としてない、この有名な喩は、その出典は涅槃經にあるのも、大智度論にあるとも言われている。おそらくそうしたところに根拠があるのであろう。しかし、善導大師が現に住んでおられた終南山から、ときどき長安の光明寺に出て来られて念仏を勧められたと、史伝にも伝えているのを読むと、おそらく、山を出た大師は樊川を渡って、この興教寺のあたりに出、さらに北に進んで長安の城内へ行かれたのであろう。その往き返りの幾度かに、身をもってこの二河白道の喩をわがものとされたに違いないのである。おそらく白道こそが東西に流れる樊川の流れであり、北と南の現世のいとなみの有る兩岸はそのままに水の河（むさぼり）と火の河（いかり）であろうか。おそらく終南山から樊川の岸を見おろした時、善導大師の胸中には、河（白道）をはさんで、此の岸（南）

と彼の岸（北）に、火の河と水の河、瞋恚と貪欲を思いうかべ、白道を直つすぐ西に、ひたむきに願往生の念仏の一行一道をつっぱしる行者のまじめ一途な姿を見出だそうとされたのであろう。興教寺の丘の上から、はるかに南に通ずる一本の細い道を通して、終南山の山々を眺める時も、いかにも白道と見ゆる細い畑の中の一本道と、その両側に迫って、いまにも白道をおおいかくすかとまでに茂っている畑とを見おろして、いかにも二河白道の喩とは、このような土地での実感であつたろうかと考えさせられたことであつた。ひたむきな清浄潔白な浄土願求の心ひとすじに、いかりの火の河、むさぼりの水の河にたとえられる此の浮世のみにくい姿をぬけきつて、西方の弥陀仏のみちびきのままに、疑い心を生ぜず、まっすぐ西に向つて走りつづける念仏行者こそ、善導大師の、いまの時代にふさわしい、念仏者のありかたである。いかにも無力非力な存在であることを知って、いささかも自分の力というものをみとめず、西から、ただまっすぐ進め進めと示されるままに無心の他力念仏をとなへながら、清らかな弥陀の浄土へと転生する人々には、全く疑いの心もなく、迷いの心もないのである。いな生ずるすきもないのである。右を見ても左を見ても後を見ても、群賊悪獸毒蟲毒蛇がせまってきた、たがいには害を加えようとしている。ただ一つ西方に向う

道のみが私の前にひらかれている。しかも西から阿弥陀仏が一すじに信じて早く来れ早く来れと勧められている。この姿こそは、善導大師が最も心を用いて説かれた。私自身、無力な人間そのものへの深い反省と、ひたすらに浄土の教主阿弥陀仏への絶対的な傾倒、うらおもてのない帰信とをあらわした二種の深い、疑いなく信ずる心Ⅱ信機信法Ⅱの具体的な表現である。

(二)

もはや、善導大師（六一三—六八一）の伝記をいまさら述べる必要もないことであろう。中国における浄土教の最大の指導者としての善導大師の伝記は古来すこぶる多い。また修飾にみちているものが多い。ただ、善導大師の在世中に、すでに同じく終南山に住んだ律僧道宣（五九六—六六七）が著した統高僧伝の巻二十七、会通伝に附載された善導伝は、善導大師よりも十八歳も年長の道宣が、高僧伝というその時代以前の道業のすぐれた高僧を伝する中に、ことさらに現存する若輩の僧善導を特に列伝したということだけで、いかに善導大師が世の崇敬を得ていたかということが察せられるのである。

ちかごろ山僧（終南山の僧）に善導という人がいる。国内をくまなくめぐって仏道を求めたずねたすえ、西河

（山西省）に行き、そこで二十九歳の善導大師は当時八十の高僧の道綽大師（五六二—六四五）や、その教団の人々とあい、ひたすら念仏弥陀浄業を行ずることとなった。のち、長安に入ってひろく念仏行を勧化した。また阿弥陀経を書写すること数万巻、士女の念仏行を奉ずるものはその数無量と称される。ある時、長安の光明寺で説法をしていた時に、一人の信者が善導に、いま仏名を念じたならばきっと浄土に生れるでしようかとたずねた。善導が「念仏すれば必ず浄土に生れることができる」と答えた。その人は礼拝しおわって、口に南無阿弥陀仏となえつづけながら、光明寺の門の外へ出、そばの柳の樹の上にのぼりつめ、合掌して西をおがみながら投身自殺をした。その事は宮中にまで上聞に達した。

この統高僧伝の記事は、一つには善導の熱心な浄土教宣布と、二つには、善導の教を信じて浄土往生を期して投身自殺した、事のなまなましさを伝えたものであろう。この記事に見える阿弥陀経書写のことも、二十世紀の初め、大谷光瑞の西域探險隊が願往生比丘善導発願の阿弥陀経古写経の発見などから、その事が確認されるというような、歴史的なうらづけさえ見出だされたのである。この阿弥陀経の願文には、往生を願う比丘善導が弥陀経を写す……罪と病とは消除し、

福と命と長遠に……などの語も見えている。また、信者が柳樹から捨身往生したことは、後には善導大師自身が捨身往生したかのように説く伝記も出てくるのであるが、最も初期の最も信頼すべき善導伝は、右のようなものであった。

(三)

善導大師の教義は、その教を信ずる私達凡夫の立場から、末世五濁の中に住む大衆の日々の造悪の生活から、自分自身を反省し、あの二河白道の論に見られるように、徹底的な自己批判、無力な私、阿弥陀仏のみちびきなくしては、どうにもならない非力さなどから出発した信機信法の深い反省が中心となるのである。

信機 決定して深く信ぜよ、自身はこれ現に罪惡生死の凡夫にして、曠劫よりこのかた常に没し常に流轉して出離の縁あることなし

信法 決定して深く信ぜよ、彼の阿弥陀仏は四十八願をもつて衆生を摂受したまう、疑いなくおもんばかりなく、彼（仏）の本願力に乗じて定めて往生を得

頼みがたき自己、自分の無力を深く信ずるところに、あさはかな自力の心をすてて、他力を頼む心が生ずる。そこに他力念仏の教、称名念仏によって、この頼みがたき自己も阿弥陀仏の大願業力を深く信ずることによって、このみにくい娑

婆世界から出離解脱して、極樂浄土に救けのままに往生させていただけるのであるとする。凡夫こそ、愚昧の私たちこそが、まさしく浄土往生の対象となるものであり、常に没し常に流轉している末法、五濁の世の私たちこそ救済の対象であることを力説された。これらの教説は、前に説いた六朝時代からの末法思想や三階教などの考え方のおしひろめられた帰結であり、時機相應の教として、浄土教がとくに凡愚の庶民大衆を主なる救済の対象として、とりあげられたことは注目すべきことである。しかもその救済は、単に坐して待つのではなく、西へ西へと白道をつき進む行者のように、みずから至誠心（まことの心）深心（深く信ずる心）回向発願心（ねがう心）の三心を具足し、身もて阿弥陀仏を礼拝し、口もて仏の功德を称揚し、意もて仏身、浄土などを憶念し觀察し、浄土の經典を誦誦し、阿弥陀仏の名号を唱える（称名）の五種の正行にはげむなど、その中でも、とくに一心にもっぱら弥陀の名号を念じ、行住坐臥かた時も忘れることなく一念一念相續してゆくものこそ、もっとも浄土往生の行人にふさわしい正定業であり、そのようなまじめな実践があつてこそ、安樂に往生させて頂くのである。徹底的な自己批判ののちに、徹底的な信念をうちたて、そのたゆみなき実践が要求されるところに、念仏者の日常信仰生活についての四修（浄土

編集後記

▽ゆかしいお盆の季節である。長い歴史のなかにうみ出された色々の行事があるが、その中、もつとも私たちに親しみ深いのはお盆の行事である。隣り合ってもニコリともしない現代人はお盆の行事を通じて、人情のゆかしさを再認識すべきであらう。

▽椎尾大僧正が、勳三等旭日中綬章を受けられた祝賀会が、六月十七日、学士会館で行われることになった相変らぬ御元気で壯者をしてぐ先生の、益々の御健康を祈って止まない。

▽世界への窓は大きく開かれつつある昨今であるが、翻っておのれをみると自己の眼を開くことは仲々できがたいことだ。洋の東西が一つになって、人類の悲願の平和を達成するためには眼を外にむけることと共に

まず迷妄の自らの開眼が必要である。

▽北欧デンマーク国より日本仏教会へ聖書の寄贈があり、その返礼をかねて、仏教会の代表二十余名が、去る六月十日旅立った。そのおみやげの、大正新修大蔵經をはじめ、各大学の研究紀要など、世界的レベルにある仏教関係の書物はさぞよろこばれることだろう。

▽正大も、理事長に松本徳明氏を迎え、佐藤学長、安居幹事の強い線で廻りつつある。宗団はえてして閉鎖的であるが、同志は仲間の足を引張らず育てることを考えたいもの。

▽宮林昭彦先生の「浄土宗のおしえ」は、本会のシリーズとしては稀に見るベストセラーとなった。これを機会にというわけで、若い人々が先生を囲んで祝っていた。もつと充実したものをと、先生は張り切っている。

▽牧田諦亮先生の中国浄土教物語は、本号で一応終ることになった。先生自身は「これから本論というところですが、しばらく休みます」とのことと、又の機会に書きつづけて頂くことにしたい。新しい型の浄土教史として、その意義は大きかった。厚く感謝いたします。

▽樋口富麻呂画伯は、京都の中堅画家で、ラジオや新聞などでも、よく出てくる方である。特におぼんの風景画で飾って頂いた。現代仏教芸術院の展覧会が、大阪の三越で開かれるについては、先生の多力の御協力の結果であることも申し添えておきます。

▽「お盆号」特集のため、林氏「茶の湯に生きた人」須藤氏「続三部経」の再発見、佐藤氏「東南アジア旅行記」を休載させて頂きました。悪しからず次号を御期待下さい。

「浄土」購読規定

一部 定価 金五十円

(送料 六円)

会費一力年 金六〇〇円

(送料 不要)

浄土

おぼん号

昭和十年五月廿日

第三種郵便物認可

昭和三十九年 六月廿五日 印刷

昭和三十九年 七月一日 発行

定価 五十円

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式会社

東京都千代田区飯田町一ノ廿二

発行所 法然上人顕仰会

電話東京二六二局五九四番

振替東京八二一八七番

◇寺に暮す人に新風をおくる◇

水野愍道著

寺院生活

B 6判・三五二頁

頒価七〇〇円(千共)

非 売 限 定

目次……おふくろ……貞随老尼……停学処分……
異変……寺男……八木祐鳳……墓守……因習のカベ
……おふくろの臨終……バカ寺……寺の道しるべ……
……一人を救う……法城の行末……その心を洗う……
おたねさんと、銀さん……『古松談般若』……妙音
尼……暮しの手帖から

寺に生れ、寺に育ち、寺に終るこの道六十年明治、大正、昭和の流れに寺はどんな暮しをしてきたか、著者は浄土宗、法永寺の住職として、その生活をありのままに、無遠慮に書いた

静岡県浜松市笠井町

申込所 法 永 寺

振替 名古屋 五四七八

日本一の生産・設備

梵 鐘 (45cm~85cm)

在庫豊富

喚 鐘 (12cm~51cm)

音 響 理 学 博 士 青 木 一 郎 先 生

梵鐘界の権威 日展参事 香取正彦先生
芸術院賞受賞



鋳物師 老子次右衛門

大阪市北区曹根崎町一丁目

大阪ヨリ十五分(梅田新道大映横東へ一丁右側)

株式会社 老子製作所 大阪支店

電話大阪 34 8847番 本社工場 高岡市横田